

# 散策ガイド

石手・道後コース  
(明治二十八年九月二十日)

① 杖つえによりて  
町を出いづれハ

稲の花

② 秋高し

鳶舞とびまひしつむ

城の上

③

③ 砂土手すなどてや

西日にしびをうけて  
蕎麦そばの花

④ 馬うまの沓くつ

換かふるや櫛はぜの  
紅葉もみじ散る

⑤ 稲いねの香かに

人居ひとらずなり  
避病院ひびょういん

⑥ ほし店の

鬼灯ほおずき吹くや  
秋の風

⑦ 秋の山

五重ごじゅうの塔とうに  
並びけり

⑧ 身の上みの上や

御鬮みくじを引けば  
秋の風

⑨ 古濠ふるぼりや

腐くさった水に  
柳やなぎちる

⑩ 稲いねの香かや

野末のすえハ暮くれて  
汽車の音





# 御宝町エリア

みたからまち



## みどころ

愚陀仏庵から子規の母校である松山中学校（現 松山東高校）へと繋がる道を、当時の様子を想像しながら、歩いてみよう。



柳原極堂（二八六七—一九五七）  
やなまきはらごきよくちう

松山中学校に入学した柳原極堂が、子規を中心とした漢詩グループの仲間になるため、子規に漢詩を送ったことから二人の交際は始まりました。

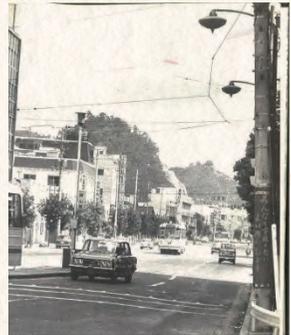
その後、子規の俳句革新運動を助けようと俳句雑誌「ほととぎす」を創刊した他、子規没後には「松山子規会」を発足するなど、子規の俳句活動を広く世に伝えた人物です。



▶ 柳原極堂

### ① 杖つえによりて 町を出いづれハ 稲の花

御宝町を抜けると、目の前に田んぼが広がり、一面に稲の花が咲いていた様子を表しています。



▲ 御宝町から見た御幸寺山（昭和45年頃）（「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四国・松山まち歩き観光より）



▲ 稲の花

### ② 秋高し 鳶とび舞ひしつむ 城の上

散策途中、松山城を見上げると、城の上空をトビがまるで舞うように飛んでいた様子を表しています。

■ 鳶とび

トビは、タカの仲間です。大柄で目立つ上に、その鳴き声がよくひびくことから、昔から親しまれてきました。鳴き声は、「ピーヒョロヒョロ」と聞こえます。



▲ 昔の松山城（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

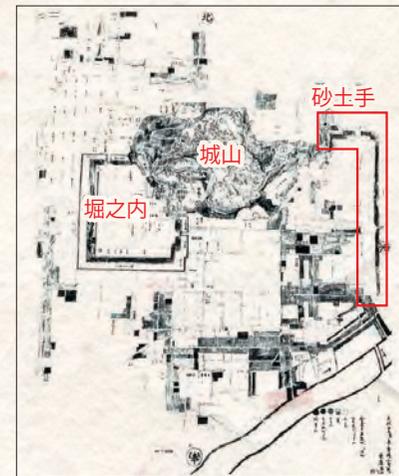


とび  
▲ 鳶



みどころ

子規も見た砂土手の名残を見つけよう。



▲昔の城下町の地図  
砂土手は、松山城の防備のために、堀を掘った土を積み上げて作られたと言われています。

③

砂土手や

すなごて

西日を受けて

にしび

蕎麦の花

そば

砂土手に上ると、一面にソバの白い花が西日を受けて美しく咲いていた様子を表しています。

蕎麦

ソバの花は、青い空との調和が絶妙なことから、俳句の世界にも数多く登場します。このエリアはもともと田んぼが広がっていましたが、前年の干ばつによる被害を受けてソバ畑に変わったと言われています。



▲蕎麦の花

④

馬の沓

くつ

換ふるや櫛の

か

はぜ

紅葉散る

もみじ

沿道で馬の蹄鉄の交換作業が行われている傍ら、紅葉した櫛の葉が散っている様子を表しています。

馬の沓

馬の沓とは、蹄鉄のことを指し、馬に履かせている靴のようなものです。まだ、そこかしこに馬が行き交っていた当時の風景が思い浮かべられます。



▲蹄鉄

みどころ②

今も残る砂土手跡を見つけよう。



▲砂土手の名残  
（「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四国・松山まち歩き観光より）

みどころ③

松山東高校にある明教館\*を訪れて、子規が学んだときの資料を見てみよう。



▲櫛の木の紅葉

\*明教館を訪れる際には、事前に松山東高校への連絡が必要です。



# 3

## 石手川エリア いしてがわ



### みどころ

石手川の土手の子規が歩いていた様子を想像しつつ散策しよう。



避病院

⑤ いねか  
稲の香に  
ひとお  
人居らずなり  
ひびょういん  
避病院

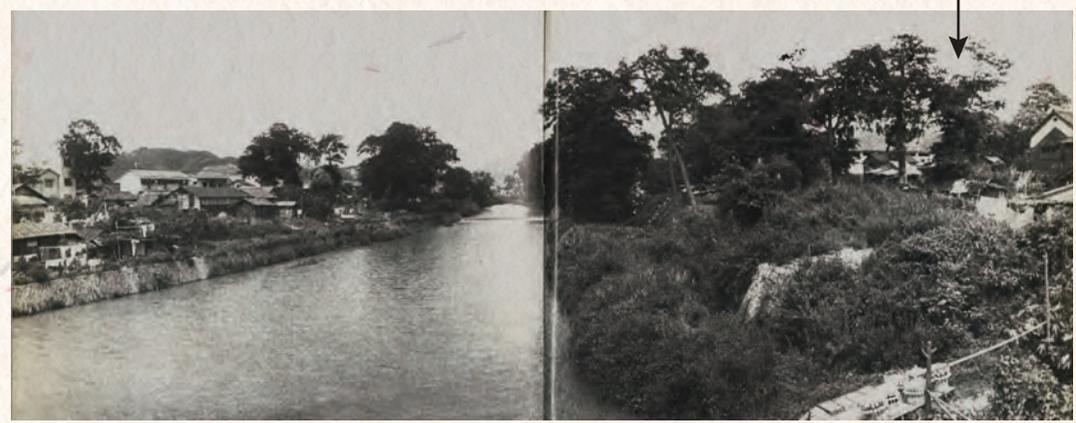
豊作の年を迎え、稲の香りがまちなかに広がり、避病院にも患者がいなくなるほどみんなが元気になった様子がかがえます。

⑥ ほし店の  
ほおずき  
鬼灯吹くや  
秋の風

秋の風が吹く中、露天商が鳴らす鬼灯の音を聞きながら、石手寺に向かって川沿いを歩いていた様子を表しています。

■ 避病院  
この時代は、日本各地でコレラ・赤痢・腸チフスなどの伝染病がよく流行し、大勢の方が亡くなりました。当時はこれらの伝染病の治療法がなかったため、病人は避病院に隔離されていました。

■ みどころ④  
昔の石手川の写  
真と今の石手川を  
見比べてみよう。



▲昔の石手川と土手にあった避病院（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

■ ほし店  
「ほし店」とは、露天商のことです。石手寺に訪れる人びとに向けて様々なものを売っていたのでしょう。

■ 鬼灯  
鬼灯とは、なす科の多年生植物です。袋状の萼（がく）に包まれ、その実は球状で赤く熟します。昔は、ホオズキの実で笛を作って鳴らし、遊んでいました。



▲鬼灯



### みどころ

51番札所の石手寺の中を探検してみよう。



▲当時の石手寺（『創造都市まつやま』より）

729年創建。四国八十八ヶ所第51番札所。境内には、国宝である二王門や本堂をはじめとする数多くの重要文化財が残されています。

## ⑦ 秋の山

ごしゅうとう

### 五重の塔に並びけり

紅葉が鮮やかな石手寺の裏山が、境内の塔と同じくらい立派に並んでいた様子を表しています。

### みどころ⑤

子規も見た石手寺の塔を見よう。



▲石手寺の三重の塔

## ⑧ 身の上や

みくじ

### 御鬮を引けば

### 秋の風

子規は石手寺でおみくじを引いたものの、あまり良い運勢ではなかったようで、がっかりした様子がかがえます。

### みどころ⑥

おみくじを見てがっかりした子規の様子を想像してみよう。

■ 当時の子規  
 そもそも、子規がこの時期松山に帰省した理由は、当世不治の病とされていた肺結核の療養のためでした。  
 子規が、恐る恐るくじを引いたところ、やはりよくない運勢だったので、秋と悪鬼をかけたのかも知れません。



▶ 当時のおみくじ  
 （愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）



みどころ

道後公園の展望台から今の松山の景色と昔の景色を見比べてみよう。



▲道後公園からの展望（『ふるさと松山』より）  
明治44年頃に撮影された写真です。道後公園から松山城方面を見ると、田畑が広がっていた様子がうかがえます。



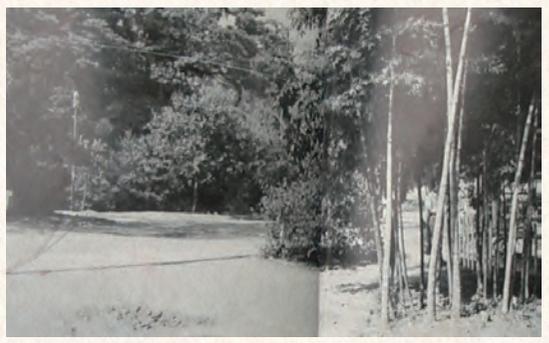
▲昔の持田周辺から松山城を眺めた風景（『ふるさと松山』より）  
現在の松山東警察署の場所に建っていた愛媛県立農業学校の写真です。（明治44年頃撮影）

⑨ 古濠や 腐った水に 柳ちる

ふるぼり  
くさ  
やなぎ

旧ふるくなったお堀の濁った水に柳が散ちるっている様子を表しています。

みどころ⑦ 道後公園で竹やぶの名残を探してみよう。



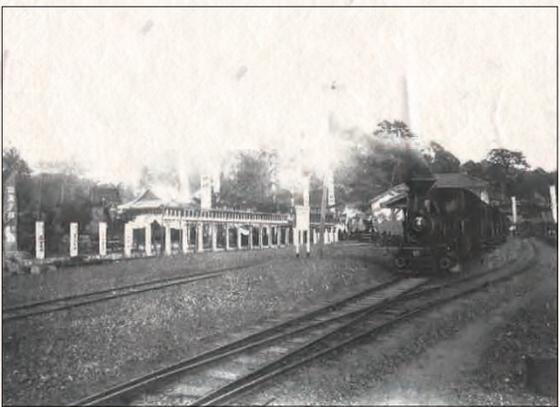
▲御竹藪（昭和45年頃）  
（「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四国・松山まち歩き観光より）

⑩ 稲の香や 野末ハ暮れて 汽車の音

いね  
か  
のずえ  
く

秋の夕暮れ時、稲の香りがただよ中、汽車の音が聞こえていた様子を表しています。

みどころ⑧ 鉄道の音に注意して歩いてみよう。



▲当時の道後鉄道（『ふるさと松山』より）

■道後鉄道  
道後鉄道は、子規が散策した約一月前の、明治二十八年八月二十二日に開通しました。子規たちもこの新しい汽車を見ようと歩いていたのかもしれない。